

---

# 魔法騎士《マジカルナイト》慶輔BASARA

里見ケイシロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジカルナイト  
魔法騎士慶輔BASARA

### 【Nコード】

N6247W

### 【作者名】

里見ケイシロウ

### 【あらすじ】

お金のために親といじめっ子達、先生達に殺害されてしまった18歳の少年、慶輔・オルダインディーナ。そして彼は20年後、魔法神ラグナによって不老長寿の人間「ヴィオラード」として復活した。ヴィオラードとなった慶輔は暗黒騎士アルカードの契約者として仲間達と共にすべての悪を破壊、すべての幸せを再生させるために戦ってきた。第3次世界大戦が終結から2023年8月。

多くの凶悪犯罪が多発している千葉県千葉市幕張町。この地で慶輔

とその仲間達の戦いが今、始まるつとじていた・・・。

**P r o l o g u e   P h a s e   破壊する者   再生する者（前書き）**

この作品には 「残酷描写」「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。

15歳未満の方はすぐに移動してください。  
苦手な方はご注意ください。

## Prologue Phase 破壊する者 再生する者

西暦2018年7月、世界は突然大きな戦火に包まれた。第3次世界大戦の開戦で

ありとあらゆる平和が破壊され数多くの命が次々と散っていった。ある者は絶望し、またあるものは希望を持ち続けた。

しかし、あなたは知っているだろうか？

この世界には魔法の力で死の世界から蘇り、すべての者に幸福と自由を再生させるため

マジカルナイト  
魔法騎士となつた一人の青年とその仲間達がいたことを

第3次世界大戦終戦から二年たった2023年8月

戦争の悲しみと苦しみから追い討ちをかけるように多くの犯罪が世界各国で発生するようになった。

臓器密輸・無差別殺人・幼児誘拐・集団テロ・暴走族・麻薬などが  
そうである。しかし、一番多いのは10歳から17歳までの少女達  
ターゲットを標的とした性的虐待・淫行・痴漢・アタルレシテオAV強制出演などといった卑劣な事件が多発しているのだ。そんな多くの犯罪に立ち向かう者達が住むという場所が存在していることをご存知だろうか？

彼らは「ヴィオラード」と呼ばれ、魔法神ヴェグナガンによって戦争で命を落とした若者を不老長寿の肉体を与えて現代世界に蘇つたものたちである。

その場所があるのは千葉県千葉市幕張町

そこには魔法力が、常に自分たちの住んでいる町の周りを回り続けていると言つミスティックワールド……。

だが、その私達が住んでいる幕張に、もう一つの幕張町があることをご存知だろうか……？

太陽は普通に動いており、アンダーワールドのような裏世界のように

な存在であり、神秘の力が入り混じる、いわば誰にも見えないもう一つの幕張町……。人々はそれを「魔法帝国ガルドリース幕張」と呼んだ。

「大丈夫ですか？もし痛い所があったらすぐ言ってください。」

帝国のほぼ中心部に位置する大病院であり、千葉県初の国際病院「ラバナスタ幕張」

一人の黒衣に身を包んだ青年が性的虐待を受け、精神病になってしまった少女達の介護をしていた。

彼の名はこの物語の主人公である慶輔・オルダインディーナ、イタリア国籍。

実は慶輔、今から22年前、当時高校3年生だった時、物凄いいじめを受けており心に深い傷を負っていたのだ。そして愛想をつかされた両親と学校の先生達にお金のために殺されてしまったのだ。

しかし魔法神ラグナロクの手によって彼は魔法人間「ヴィオロード」として蘇ったのだ。

その代償として彼は不老長寿の肉体と共に500年行き続けなければならぬのだ。

それでも慶輔は前向きだった。戦争と暴力から罪のない人々の幸福の再生させるため、そしてすべての悪を破壊するため慶輔は戦い続けるのだった。

入院している少女達の世話をしている慶輔に一人のナースが声をかけた。

「慶輔君、あなたにお客様よ。会ってあげて。」

「申し訳ないんですけど僕今手が離せないですよ。そのお客さんにお引取り願ってくださいませんか？」

慶輔がそう言うとナースの後ろから一つの影がすばやく慶輔に襲い

掛かった。

「この馬鹿！また女の子の裸目当てで病院で手伝いのフリをしていたのね！」

「え！もしかして佳恵！？なんでなんで！？」

佳恵と呼ばれたポニーテールの少女はいきなり中華剣を取り出して慶輔の後ろに回りこみ  
左手で首を固め、右手で顔面に突きつけた。

「もう、私があんたがいつまでたっても帰ってこないから迎えにきたんじゃない！？」

少女の名前は佳恵・イーゲルシュダイン、ドイツ国籍。彼女は慶輔とはちがい戦争で命を落としており  
死の世界から蘇ったヴィオラードと呼ばれる不老長寿の人間である。

「それは分かっているけどさ、早くそのB72のまな板胸からどけてくれない？痛いんですけど〜！」

「うっさい！まな板言っくな〜！今度言ったら生きたまま棺桶に閉じ込めて東京湾に叩き込むわよ！」

実は慶輔、女性の気持ちを理解することができないという弱点を持っていたのだった。たびたび女性と会話するときも悪気のない突っ込みもたままましてしまうのだ。さすがの佳恵もその慶輔の心無い発言に

キレたようだ。と、その時慶輔の頭に伝書鳩がふわりと降りてきたのだった。

「あら？シド司令からかしら？いったいなんだろう・・・？え〜と、

なになに……。」

佳恵が伝書鳩から手紙を受け取り、読んでみると真剣な表情になり少しづつ読み上げていった。

そして大きな声を上げて慶輔に慌てて怒鳴りつけた。

「ちょっと慶輔！病院で油売ってる場合じゃないわよ！緊急事態だよ！？」

「一体どうしたんだ、佳恵！」

「海浜幕張駅周辺に暴動発生よ！！いま広海と麗奈が出撃中でありてこずってるらしいわ！」

「ええ！！！！とこで暴動は誰が指揮しているんだ！？」

慶輔が慌てた表情で尋ねると佳恵は重い口をゆっくり開いた。

「ガルバディアの連中よ……！あいつら、子供達を誘拐と民間人の虐殺が目的らしいわ！」

「あいつら、また性懲りもなくあんなことを繰り返しているのか！よし、行こう佳恵！」

そういつて慶輔と佳恵は病院から大急ぎで出て行った。するとそこには飛空戦艦「ラファエル」が止まっていた。二人が近づくと「ラファエル」から女性の声が響いてきた。

「慶輔、佳恵！急いでラファエルに乗って！！海浜幕張駅前でガルバディアの連中が暴れまくってるわ！」

あなた達のナイトドールはいつでも出撃できるようにしてあるから！」

「助かったよ、アルマ艦長！とこで被害はどうなってる！？」



アルマと呼ばれた艦長らしき女性はTVを慶輔に差し出した。そのモニターには海浜幕張の映像が映し出されていた。被害は予想以上に広がっていた。もはやひどいってレベルではないくらいの悲惨さだった。

その映像を見た佳恵はアルマに指示を出した。

「アルマ艦長！海浜幕張まで急いで！」

「了解！出撃準備はしておいてね！」

海浜幕張駅前広場では、一人の銀髪の男を筆頭に、ガルバディアの武装集団が市街を破壊しまくっていた。そこには赤色のはねた髪と額に鉢巻を巻いたスペイン国籍のヴィオラード、広海・ナイガンハルマスとストレートのロングヘアにカチューシャをつけたフランス国籍のヴィオラード、麗奈・フローナジェルダンが搭乗している2体の猫の頭を持った人型機動兵器ナイトドルがガルバディアとの戦闘を繰り広げていた。

「大丈夫か麗奈！」

「私は平気！それより広海君は指揮官を叩いて！」

麗奈が広海に指示を出すと暴動のリーダー格と思われる一人の男性が二人に声をかけた。

「そろそろ限界が近いんじゃないのか？君達二人だけでこの大人数の相手をするつもりか？」

「ああ、そうだよ！お前らみたいな弱い奴に暴力ふるって楽しんでる奴が一番許せねえんだよ！」

「ククク……。そうか、そんなに僕らが許せないか……。さすがはうじ虫の味方をしているだけはある。やはり弱者の相手には弱者が一番お似合いだよ。アハハハハハ！」

「てめえ！覚悟はできてるんだろつな！ぶっ倒してやる！」

広海のナイトドールが敵指揮官機に突っ込もうとしたその時、何かの音がこちらに近づいているのが聞こえた。即座に反応したのは、麗奈だった。

「広海君！誰か来る！」

その言葉に反応して広海は周囲を見渡した。すると、確かに何か近づいているような音が聞こえる。

しかもその音は、かなり速い速度で接近しているようだった。この異変はあの二人も気付いていた。

「こ、この音もしかして慶輔と佳恵！？」

何かの機械の音のようにも聞こえた。

「ほう、うじ虫にも助っ人がいたと言うのか・・・。」

敵指揮官の予想は、最悪の形で的中することになった。

「そこまでだ、ガルバディア！！！」

どこからか聞こえてきた声に、四方八方から2機のナイトドールが出てきた。

そして2機から自由落下ながら黒色の光線を乱射して、相手を威嚇した後、雷のエネルギー弾が周囲に飛び散った。すると今度は、月を描いた一閃がガルバディアのロボット達の周りを駆け巡った。その一閃は瞬く間に敵機の半数を倒してしまった。

「なかなかやるね。勝負の前に君達の名前を覚えてくれないか？僕に倒される弱者の名前を、僕の心の墓標に刻むためにね。」

敵指揮官の冷酷な台詞に慶輔は思わず力強く言い返した。

「その前にまず自分から名を名乗ったらどうだ！これが最低限のルールというものだろ！」

「ちよつと慶輔！突っ込む所ちがうでしょ！」

慶輔と佳恵の漫才じみた会話に敵指揮官は思わず失笑した。

「ハハハハハ、これは失礼。僕はガルバディア帝国の30聖将の一人、内海堂真だ。僕が乗っている機体はタナトス・バハムートだ。」

「僕は黒猫騎士団の一人、慶輔・オルダインディーナ！愛機は暗黒騎士アルカードだ！」

「同じく私は佳恵・イーゲルシュダイン。幻獣騎士シャローンのパイロットよ！」

お互いの紹介を終えた慶輔と佳恵。広海と麗奈も2人に合流しようとした。すると慶輔は2人にある指示を出した。

「広海、麗奈。君達はラファエルに搭乗するんだ。そのダメージじやこれ以上の戦闘は続行不可だ。」

「でも、慶ちゃん……。2人だけで大丈夫なの！？」

「任せて、広海、麗奈。あんな連中、私と慶輔だけで十分なんだから！」

「そうか、じゃあ慶輔、佳恵！こいつの相手は頼むぜ！死神騎士ドルビー、魔剣騎士ダルタニア、後退だ！」

そういつて広海と麗奈のナイトドールと一緒にラファエルに搭乗していった。そして内海堂は冷酷な笑みを浮かべて慶輔と佳恵に語り

かけた。

「いいのか？大切な友達2人を逃げさせて？こうしてしまつたら君達が不利になるんじゃないのか？」

内海堂の冷酷な質問を跳ね返すかのように慶輔と佳恵は強気な気迫を見せ付けた。

「人数的には僕達が不利になっていることは十分理解している・・・でもお前達のせいで苦しい思いをしている人達を無視することはできない！この町には多くの痛みと苦しみをもつた人達がたくさんいるんだ！」

「あんだ達の存在ははつきり言つて迷惑よ！さっさとお引取り願おうかしら！？」

慶輔と佳恵が武器を向けたが、内海堂は決して動揺しなかった。それどころか余裕な表情を浮かべ慶輔と佳恵に挑発を行った。

「面白い、ならばここで君達には死んでもらおう。ではゲーム開始と行こうか！」

そういつて内海堂はライフルを取り出し慶輔と佳恵に向けて発砲した。だが二人は残像を残しながら華麗にかわしていった。すかさず慶輔はアルカードの武器であるエクスカリバーでタナトス・バハムートを攻撃していった。

「なかなかやるな。だがこの程度の腕ではタナトス・バハムートは倒せないよ？」

「余裕噛ますんならエクスカリバーをはじいてみせなさいって！このままだとお前もお陀仏だよ！？」

「ではそうさせて貰おう。」

内海堂が冷酷な台詞を述べた次の瞬間、タナトス・バハムートが一瞬にして消えた。

「消えただって！一体なぜ!？」

混乱する慶輔の後にタナトス・バハムートが猛スピードで襲い掛かってきた。そして武器のサーベルでアルカードを攻撃しようとしたその時、シャローンが間一髪のところバハムートの攻撃を食い止めた。

「ほう、庇ったか……。しかし、この戦いかた悪くないな。」

「大丈夫、慶輔!？」

「ありがとう佳恵、しかし内海堂あいつのロボットが消えたんだけどどうなってるんだ!？」

すると内海堂は特殊武器を持ちながら傲慢な態度で種明かしをした。

「タナトスロボにはマジカル・ギアという特殊機能を装備しているんだ。僕が一瞬に消えることができたのもこれのおかげなのさ。」

「マジカル・ギア?」

「簡単に言えばガルバディアの魔法器具さ。第3次世界大戦の時、魔法隕石が墜落して世界各国に有害を

与えたことは知っているだろう?君達が今乗っているロボットはこの魔法隕石が持ってきた魔導エネルギーによって動いているんだ。マジカル・ギアもそのエネルギーで作られてるんだ。」

「一体どうしてそんなものを……?」

「知りたいかい?知りたければ僕を倒してからにするんだな。」

そういつてタナトス・バハムートはまた慶輔と佳恵から姿を消してしまった。二人はまたしても内海堂の

戦術にはまっけてしまったようだ。二人が混乱しているうちにタナトス・バハムートが上空からライフルを構えていた。

「そんな！？上空からだなんて！？」

「しまった！！隙を突かれたか！？」

「ははははは！これでジ・エンドだ！」

内海堂が勝利を確信した台詞を履き捨てると共にタナトス・バハムートのライフルから無数のレーザーが発射された。もうだめか・・・。二人がそう思ったとき二体の黒い影がアルカードとシャロンの前に現れ、バリアを生成してレーザーをはじき返した。その影の正体は広海のナイトドル、ドルビーと麗奈のナイトドル、ダルトニアだった。しかも二体とも傷跡が完全に修理されていたのだ。

「なるほど。君が二人の仲間を逃がしたのはこういう事だったのか・・・。」

慶輔は内海堂にさっきの仕返しをするかのように種明かしを始めた。

「現場に到着する前に本部から補給物資と修理道具をラファエルに詰め込んでおいたんだ。そこで僕はあるものを利用して広海と麗奈に連絡をしておいたんだ。僕らが到着したらラファエルに乗って修理と補給を受けるようにつたえたんだ！お前と戦う前にね！」

「ある物・・・？」

「それはこいつだ！」

慶輔はかぼちゃのネックレスを取り出して内海堂に見せ付けた。

「これは変わったネックレスじゃないか。こんなものが兵器だとい

うのか？」

内海堂が問いかけると信じられないことが起こった。かぼちゃのネックレスはいきなりしゃべりだしたのだ。

「残念だったな敵の大将！俺はただのネックレスじゃないぜ！」

「なるほど、君達も変わったおもちゃを持っていたとはね。」

信じられない出来事に内海堂は少しだけ驚いたようだ。

「俺の名前はマトーヤ、マジカルドールの一つさ！俺の特殊能力の一つテレパシーで広海と麗奈の機体に

慶輔の伝言をお前さんに聞こえないよう伝えただ。それで広海と麗奈の機体はお前さんが知らない間に

修理されていたわけだ。」

「なるほど、僕は君達にまんまといっぱい食わされたわけだ。」

かぼちゃのペンダント、マトーヤが誇らしげに説明を述べると内海堂はなんと戦意をなくしたのか、いきなり撤退をしようとしたのだ。

「待てよてめえ！あれだけ散々暴れていったくせに詫びも入れずにとんずらしようってのか！？」

「いや、今のままでは君達に勝てる自信がないから撤退させてもらうのさ。どうやら僕達には君達を倒すのにまだ準備ができていなかったようだ。」

「僕達を倒す準備ができていない？どういうことだ！」

「そのうちわかるさ。では黒猫騎士団の諸君。しばしのお別れだ。次会うときはくれぐれも僕を失望させないでくれよ？」

そういつてバハムートは立ち去るかのように超高速で大空へ向かっ

て飛んでいった。

「一体何なのよアイツ!? 私達が有利になったとたん自分だけさっさと逃げて!」

「確かガルバディア30将って言ったんだよな、あの銀髪野郎。」

広海と佳恵が愚痴をこぼしているうちに麗奈が何かを見つけたようだ。そこで麗奈は慶輔たちを呼んだ。

「慶ちゃん、ちょっと来て!」

「どうした、麗奈?」

「今現場を見回したらこれらが落ちていたの!」

麗奈が見つけたのは青色のカプセル、赤色の細長い注射器、緑色のDVD、黄色い花びらだった。

「麗奈、これって一体なの!?!」

「どう見てもカプセル、注射器、DVD、なんかの花びらなのよ。」

さっきの内海堂って奴が落としたんだと思う。」

「まあ、本部に帰ったらシド司令に報告しようぜ。なんか知ってるかもしれないしな。」

佳恵、広海、麗奈が相談しているうちに慶輔はただ一人、大空を見つめていた。

「慶輔、この内海堂って奴なんか裏がありそうだぜ?もしかしたらまた大きな戦争が起こっちゃうかもしれないぜ?」

「ああ、もし起きたら僕達がとめてやる・・・!戦争を破壊してみんなの自由を再生させるんだ・・・!」



慶輔の瞳には怒りと悲しみが宿っていた。まだ人間だったあの頃の  
苦しい思い出が蘇ったかのように・・・。

- - - t o b e c o n t i n u e d - - -

**Prologue Phase 破壊する者 再生する者（後書き）**

どうも始めまして、この作品でこのサイトで初めて小説を書かせていただきました

里見ケイシロウです。私はゲーム好き（特にスパロボとFFシリーズ）だったのでオリジナルのロボットストーリーを作ってみました。

まだまだド素人ですが皆様に愛される作品を目指しております。どうか皆様よろしく願います。

## Phase 1 惨劇開幕

太陽が幕張の大森林の上空を回り続ける朝。

普通の人間にとっては当たり前前の日常生活の流れでも、ほんの数年前まで端の世界をさまよっていた慶輔達ヴィオラードにとっては不慣れであった。それは、ガルドリースの住民達にとっても同じことであった。黒猫騎士団本部。その一室に、真紅の太陽の光が差し込まれる。

「…………ふああ〜…よく寝た〜…………。」

それが目覚まし代わりになっていたのか、慶輔がゆっくりと体を起こした。

昨日海浜幕張駅周辺広場でガルバディアの將軍の一人である内海堂と思ふ存分戦ったもあつたのか、その余韻がまだ残っていた。

「慶輔、昨日の戦闘で内海堂あいつが言っていた言葉覚えてるか？」

「ああ、確か僕達を倒すにはまだ準備ができていないって言ったな。」

慶輔とマトーヤが会話をしていると、一足遅れて佳恵も目を覚ました。

「……………おはよう慶輔。」

「おはよう、佳恵。ねえ、あんた麗奈から聞いた？礼の物について。」

「礼の物？」

「昨日麗奈がさ…………。」

佳恵から礼の物について説明を聞いた慶輔は少し納得した。

「なるほどね。その4つが内海堂が残していったのかもしれないのか。」

慶輔がそういうと部屋のカーテンを勢いよくあげた。一気に部屋全体に、太陽の光が広がる。佳恵はそのまぶしさに思わず目を細めた。

「それにしても内海堂って奴、一体何が目的なのよ？もしかして侵略者じゃないよね？」

「わからない。でもアイツを放つて置くと第3次世界大戦の二の舞だ。なんとしても奴を止めるんだ。」

「了解。」

慶輔に言われて佳恵も納得した。二人はもともとただの人間。ヴィオラードになってから生活のリズムが崩されていたのだ。この世界の人間は、普段どりの生活を送る権利をもっている。

慶輔たちにとっては過酷ながらも、戦いが常識なのかもしれない。窓の景色を眺め、まどろんでいた時、背後のドアをノックする音が。

「慶輔、佳恵、いるか俺だ麗奈も一緒だ。入るぞ？」

「広海、麗奈？どうぞ、鍵は開いてる。」

許可を得て部屋に入ってきた広海と麗奈。しかし入ってきたのは彼らだけではなかった。なんと彼らの後ろに白い猫の巨大なぬいぐるみが居たのだ。

「おはよう、慶輔君に佳恵君。昨日は大変だったそうだね。」

「シド司令！いらしてたんですか！？」

白い猫のぬいぐるみの正体はシド・マクラーレン。彼こそが慶輔の上司でもあり、黒猫騎士団の最高司令官でもあるのだ。シド司令は慶輔たちとは違いぬいぐるみに人の心と魂が宿っているのだ。これはマジカルドールといわれる種族なのである。

「昨日のことは報告受けてる。あの内海堂真というガルバディアの将軍と戦ったそうだね？」

「はい、奴はマジカル・ギアという秘密兵器を持っていました。その兵器の能力のおかげで奴を仕留める事ができませんでした。」

そういつて慶輔は頭を下げた。シド司令は慶輔を見てある提案を思い浮かべた。

「ならばさ、我々黒猫騎士団もマジカル・ギアにそっくりな兵器を作ろう！だからさ、慶輔君、頭を上げなさい！」

「え！？大丈夫なんですか？でもいったいどうやって!？」

「実は昨日麗奈君からもらった例の黄色い花びら、魔法植物の一つであるヴィユヴェールであることが判明したんだ。これなら黒猫騎士団もパワーアップも夢じゃないかもしれないんだ。」

「魔法植物！？それどういう物なんですか？」

麗奈の質問にシド司令は軽々と説明を開始した。

「魔法植物は第3次世界大戦中に魔法隕石が落ちたのは知ってるはずだ。隕石の中にある魔法力が

暴走して世界中に散らばって感染してしまっただ。そのおかげで魔法植物と魔法動物が世界あちこちに

出現するようになったんだ。簡単に言えば君達が乗ってるナイトドールの燃料の一つだ。」

シド司令の説明中に対して広海はある疑問を言葉にした。

「それは良いんだけどよ。そのヴィユヴェールって魔法植物はどこにもあんのか？」

「大丈夫だ。茨城県の大洗海岸の裏側にある妖花都市バーフォンハイム鹿島の菜の花山の頂上にたくさん咲いてる。あそこは年中割いてるからいつでももらえるんだけどあるものが無いとヴィユヴェールもらえないんだよ。」

その言葉に慶輔は緊張しながらシド司令に質問した。

「司令、そのあるものとは……。」

「慶輔君、広海君ちよつと耳かして……。実は……。」

シド司令は慶輔と広海に耳打ちをしてある物の名前を打ち明けた。慶輔と広海は思わず絶叫に似た叫び声を上げてしまった。

「司令！！！！可愛いサキュバスが必要ってそれ本当ですか！？？」

「その通り。」

「サキュバスってあの男性の精液を吸うって魔物なんだろ！？そんなのどこにいるんだよ？」

もはやナイトドールのパワーアップは夢のまた夢。慶輔と広海は絶望的だ。ヴィオラードたちが住んでいるガルドリースにサキュバスなんているわけなかった。誰もが諦めかけたその時、どこからかいきのいい少年の声がした。

「なんだつたらサキュバス紹介しようか？俺のガールフレンドなんだけどさ。」

「その声はルーネス君か？」

シド司令がその声を聴いて振り向くとそこには銀色の長髪の少年と茶髪の少年がいた。

「シド司令、久しぶりだな。さっきの話、聞かせてもらったぜ。ナイトドールのパワーアップのためにはヴィユヴェールが必要なんだから？ だったらさ、俺もスコールと一緒に仲間に入れてくれよ。」

銀髪の少年・ルーネスがそう言うと茶髪の少年が慶輔に目を向けて話しかけた。

「慶輔。昨日内海堂って奴にひどい目にあっただって？ なんだったら俺もその内海堂って奴の討伐に参加させてよ。俺のガールフレンドも慶輔の手伝いをしたいって言っしさ。」

「ところでさ、スコール。あなたのガールフレンドってさ、サキユバスなの？」

佳恵の質問に対してスコールは自信満々にそう答えた。

「ああ、魔女帝国ドラクロア館山に平和のために戦うサキユバス達がたくさん働いているんだ。彼女達もナイトドールのパイロットだから戦力として十分だからさ。」

スコールが説明を終わった後、マトーヤが何かを思い出した。

「おっといけない！ 俺としたことがすっかり忘れてたぜ！」

「マトーヤ、何か思い出したのか？」

慶輔はマトーヤに何を思い出したのかたずねてみた。

「ルーネス、確かお前サキユバス達で結成されたアイドルグループのメンバーと仲が良かったよな？たしかセシル・スケテルンブルクって名前だったよな？」

「正解、さすが物知りマトーヤだな。ちなみにバスト93もあるから気をつけるよ？見たらびっくりするぜ？」

自信満々に自慢するルーネス。スコールが気づくと佳恵と麗奈がすっかり暗くなってしまっていた。それを聞いた慶輔はどうしたのかとたずねた。

「お願いだから少しの間はなしかけないで……。」

「私バスト70しかないもん……。」

二人の暗いムードを出している中、シド司令が次の指示を出した。

「よし、明日のPM6:00に向かおう。スコール君、ルーネス君、明日君達も同行をお願いしてもらっていいかな？」

もちろんという気持ちでスコールとルーネスは首を縦に振った。

翌日PM6:00.

ドラクロア館山の中心街。ここは千葉県の中でも有名な商業施設でもありその中枢地に位置するダイヤモンドグラント。シド司令と慶輔達はここに来ていた。麗奈とアルマはこの商業施設の広さに驚いていた。

「広くて豊かな街だよね。」

「それにここの人達明るい表情だしてるところもいいわね。」

「おいみんな、歌が聞こえてくんだけど？」

広海の言葉に、全員耳を研ぎ澄ました。すると、なにやら少女達の



歌声が聞こえた。その歌声の場所は小さなステージのような場所があった。慶輔たちがそのステージへと向かうとスコールが指を差して慶輔に説明した。

「慶輔、あれがセシル達だよ。」

そこには、黒色の衣装に青色のスカートをはいた5人のサキュバスの少女が観客の目の前にピアノに合わせて唄っていた。慶輔が少女達の綺麗さに酔いしれれば、アルマはその中にある情熱さに気付いていた。

「すごく可愛いな……！佳恵と麗奈ももう少し可愛かったらな。」

「慶ちゃ〜ん、それどういうこと?」

「それにしてもずいぶんがんばってるのね、あの子達。」

その時、施設内に警報が響いた。このアクシデントに慶輔も騒然とした。そして放送が流れた。

「みなさん、ジャッジロボがこの施設に侵入してきています！大至急非難してください！」

慶輔がすぐに何が起きたのか確認する。住人たちがすぐさま避難を開始したその時、麗奈がただならぬ気配を察知し、すぐに周囲に目を向けた。広海は銃剣を取り出し、蛇のロボットが青色のロングヘアの少女の足元から襲い掛かろうとしていた瞬間を確認すると、すばやく動き、蹴り飛ばした。

「オラ、何してやがる！そこから去りやがれ！」

広海がその少女を蛇型ロボットから守るとアルマは携帯電話を取り

出し何か連絡をしていた。別の場所では赤色のサイドテールの少女がクラゲ型ロボットの10本の触手に襲われる寸前であった。少女は恐怖のあまり失禁していた。彼女は号泣しながら助けを求めると大きな声が聞こえた。声の主は慶輔だ。

「てやあああああ！」

慶輔は叫んだと同時に騎士剣でクラゲ型ロボットを真っ二つに切り刻んだ。かろうじて命は守ることに成功したがそのショックで彼女はまともに喋れなくなってしまう、精神にダメージを負っていた。慶輔はすぐさま彼女を背負って安全な場所に彼女を避難させるためその場を立ち去った。黒猫騎士団が住民達を気遣っていた時、すでに周囲は謎の武装集団に囲まれていた。

「貴様ら、投降しろ！さもなければこの娘を殺害するぞブヒー！」  
丸々太った男が、緑色のポニーテールの少女を人質にとって投降を求めた。絶体絶命だったが、スコールとルーネスにとってはマジギレ寸前だ。

「このメタボ野郎！この娘を放してもらおうか？」  
「さもないとどうなるかわかってるよな！？」

二人はお互いの武器を取り出した。しかし男は狂気を纏ったままガンを飛ばしていた。

「この俺様はジャツジセイバースの一人、小林義之様だぞブヒー！  
！！俺様に逆らうとこの娘の命はないぞブヒー！」

ルーネスは長い両手斧を手に飛び掛かると、小林義之の後に回り込

み彼を切りつけた。

「ぎああああ!」

ルーネスの華麗なる技が黒色の弧を描く。ある程度ダメージを受けた小林は思わず少女を手放してしまった。するとスコールが超高速で移動して少女をキャッチした。この後黒色のロングヘアーに白いヘアバンドの少女があらわれた。すると彼女は日本刀を取り出し小林に向けてこう宣言した。

「そこの変質者!これ以上の悪行はセシル・スケテルンブルクが許さないわよ!」

セシルと名乗った彼女は瞳に怒りを纏わせていた。すると、小林が怒り任せにこう言った。

「ちきしょー!いつかおまえらにてんちゅうをくだしてやるからな  
ー!」

捨て台詞を残し、小林率いる武装テロたちは去っていった。今までのやり取りに、黒猫騎士団はしばし呆然……。佳恵は立ち尽くしたまま、しばらく動くことが出来なかった。

「……………行っちゃったわね、何なの?あの連中……。」

「……………あつ、そうだ!あの子達大丈夫かな!??」

その言葉と同時に赤いサイドテールの少女を非難させた慶輔は、スコールとルーネスのところに向かった。

「スコール!ルーネス!彼女達は?」

「ああ。今のところ無事だ。セシルは大丈夫だけど他の4人はシヨックを受けて今ラファエルで精神治療を受けてるよ。」

スコールの報告を受けて慶輔はほっとした。するとセシルと名乗った日本刀を持った少女が慶輔に近づいてきた。

「あの、慶輔・オルダインディーナさんですか？私達を助けてくださってありがとうございます。」

そう言ってセシルは慶輔にお礼を述べた。その仕草に、慶輔は照れ笑いを浮かべた。佳恵はセシルに質問をした。

「ところであなた達がルーネスの言ってたサキュバスかしら？見たところ、普通の女の子しか見えないけど？」

「はい。正確に言えばヴィオラードのナイトメアタイプです。私達普通のヴィオラードの女の子と違って容姿がちよっと違いますからドラクロア館山（こく）で働いているヴィオラードの女の子はサキュバスの能力を所持しているんです。」

ナイトメアタイプのヴィオラード      黒猫騎士団にとっては聞きなれない名前であった。

「セシルちゃん、あなたの仲間は今ラファエルで精神治療を受けてもらってるの。彼女達のこと詳しく聞きたいからラファエルまで来てもらえる？」

アルマはセシルに対して搭乗を求めた。すると茶色い長髪に薔薇の髪飾りをつけた少女が慶輔の前に姿を見せた。

「できれば私を一緒に一緒にさせてくださいませんか、慶輔・オルダイン

「ディーナさん。彼女達やガルバディアのこともお話いたしますので。」

マトーヤは、少女の言葉が終わると口を開いた。

「お嬢さん、ガルバディアの事っていったよな？あんた一体何者なんだ？」

「私は魔女帝国ドラクロアの女王、ティナ・リヒトシュタイナーと申します。」

「うわあお！女王様ですって？いきなりどうしてここに！？」

佳恵が仰天しているその時、ティナと名乗った女王らしき少女は黒猫騎士団に謝罪を述べた。

「本来私達がドラクロアを守らなければならないのに他の帝国の方々に助けていたでなくなんて……。本当に申し訳ございませんでした。」

「いや、謝らなければならないのは僕達のほうです。昨日の戦闘でナイトドールのダメージが完全に回復できていれば彼女達は恐ろしい思いしなずにすんだのに……。」

慶輔は真剣に謝罪をした。まさかこの楽しい施設に武装テロ集団が襲い掛かってくるのを予測することができなかったから。ティナはルーネスたちから連絡を受けた内容を慶輔に説明を行った。

「話はルーネスから聞きました。バーフォンハイムの菜の花山に咲いているヴィユヴェールを貰うのに私達の力が必要だと。」

「ガルバディアに対抗するのにどうしてもヴィユヴェールが必要なんです。お力、貸していただけませんか？」

慶輔の要求にティナ女王は喜んで首を縦に振った。

「この私達でよければあなた方のお力になります。いえ、お力にさせてください！」

「本当ですか！？ありがとうございます！これでヴィユヴェールが貰えそうです。」

これでガルバディアに対抗する力が手に入る　　わずかな希望を得た慶輔。すると麗奈が突然、何かの異変に気づいた。

「ねえ、慶ちゃん……。イチゴの香りがものすごく慶ちゃんからするんだけど香水つけた？」

「え？だって僕香水なんてしないよ？」

「ちよつと待て慶輔……。お前の背中、赤い液体がたっぷり付いてんぞ！」

その台詞を聞いていた慶輔は思わず背中を振り向くととんでもない事になっていた。なんと背中が赤い液体で汚れていたのだ。するとティナが慶輔に質問した。

「慶輔さん、さっき失禁した少女を助けたとおっしゃいましたよね？もしかしてその子赤い髪にサイドテールじゃありませんでしたか？」

「あ、はい、そうですけど！？」

その言葉を聴いたティナは思わずあわてた表情をあらわにして慶輔に謝罪をしながら説明した。

「慶輔さん、この赤い液体今すぐ洗い落としてください！この子の体から出てくる液体は魔幽水まゆうすいといって付着してから2時間経過する

と暴走して大爆発を起こすんです！」

それを聞いた慶輔達は思わず絶叫に似た叫び声を上げてしまった。

「え〜！それホントですか〜！」

「おい慶輔！爆発する前に早く団服洗濯してこい！」

この後黒猫騎士団は思いもよらぬ大きな戦いに巻き込まれることになる。そしてそれは、この世界の惨劇の開幕が始まるを意味するのだった……。

## Phase 2 明かされ続けた真実

「悪いな、慶輔。この娘達のナイトドールが用意できなくてこんなことになっちまった。」

「仕方ないよルーネス。僕も昨日テロ集団が襲ってくるだなんて予測できなかったんだ。」

昨日、ドラクロアでの白兵戦を終えた黒猫騎士団はティナ達を連れてラファエルでバーフォンハイムへ移動していた。4人が眠っている救護室の中で慶輔は改めてティナに、ガルバディアについて質問を開始した。

「ティナさん。改めてガルバディアについてお聞きします。いつごろガルバディアのことを耳にしたのですか？」

「ちょうど一週間前です。私達が町の警護をしている時でした。12歳くらいの男の子の死体が川のそばに発見されたんです。その死体にはメッセージが書いてあったんです。」

その言葉を聞いた佳恵はティナに思わず質問をした。

「なんて書いてあったの？」

「はい、なんだか『いい子に愛を！悪い子に正義の鉄槌を！オール・ハイル・ガルバディア！』と死体の背中に書いてあったんです。里見警察署の調査の結果、この男の子の死体から内臓が取り出されていたらしいんです。」

「どついう意味だ、それ？」

「それに内臓なんて取り出すなんてひどい……！」

広海と麗奈がそれぞれ表情をあらわにするとマトーヤがあることを



思い出した。

「慶輔、佳恵。二人は内海堂あの男いつてなかったか？君達の臓器は高く売れるって？」

「そういえば・・・！内海堂の奴こういつてたわ！まさかあの連中臓器密売もやってたのね!？」

「こうなるともしかしてあの事件、ガルバディアあいつの連中の仕業かもしれない！」

この事件、ガルバディアが起こしたのかもしれない、慶輔と佳恵がこう考えていた。すると、突然ドアのノックする音が。

「ティナ女王様。お茶をお持ちしました。」

「スタイナー、入ってきて。」

ドアを開いた瞬間、慶輔達は少し目を疑った。なんとブチハイエナのきぐるみが救護室へ入ってきた。

するとティナがこのことを説明をした。

「皆さん、この者は私の執事長でマジカルドールです。」

「……来訪者の皆様、セシル様達を助けて頂き真に感謝します。」

自分はティナ女王の執事長を勤めておりますスタイナーと申します。以後、お見知りおきを。」

スタイナーの言葉で、慶輔達は彼と向かい合うような位置に移動した。すると麗奈はいきなり質問をスタイナーに開始した。

「スタイナーさんでしたっけ？ちよつとドラクロアの事と彼女たちについて聞きたいんですけど。」

「承知いたしました。ではまずはこれをご覧ください。」

そう言つてスタイナーは一枚のDVDを取り出してレコーダーにセツトした。するとあるひとつの映像が浮かび上がった。それはドラクロアのナイトドールだった。

「この5体のナイトドールは我々ドラクロアの物でございます。そしてこの契約者がセル様、アーシェ様、レフィア様、リノア様、オヴェリア様でございます。彼女達は第3次世界大戦後に身勝手な大人のせいでも命を落とされてしまいました。こうしてラグナ様のお力にヴィオロードとして復活したわけでございます。」

「これがドラクロアの戦力つてわけね……。でもなんで第3次世界大戦が起きたんだろう？」

佳恵が疑問を述べたその時、一匹のドリルの角が生えた黒い猫がいきなり慶輔達の前に現れた。

「それは僕が説明するよ。まずは第3次世界大戦が起こるきっかけになったのかをね。」

ラグナと呼ばれた黒猫。彼こそが魔法神ラグナである。慶輔達をヴィオロードとして現代の世界に蘇生させた人物である。そして慶輔達をナイトドールの契約者にさせたのも彼だ。慶輔と魔法神ラグナ、彼らが会うのは死の世界以来だ。

「ラグナ様！？どうしてここに!？」

「君達がガルバディアの人間達と戦つたと聞いてね。何かわからない事があつたら説明しようかなと思つて今の世界にやってきたのさ。」

慶輔とラグナのやり取りに無理矢理入り込むかのように麗奈はラグ

ナに話しかけた。

「ラグナ様、聞かせてください。第3次世界大戦が起こった理由を。」

「その前にみんなに聞こう。なぜ今の世界各国に12歳から17歳までの少女をねらった性的虐待事件が発生したり盗撮、痴漢、覚醒剤強制使用などの被害が多発していると思う？」

「そりや味分たちの性欲を満たすためじゃねえのかよ？」

広海の解答をラグナはあっさりとは否定してしまった。

「違うな、ほとんどの人間が多くの収入源を手に入れるために少女達を狙っているに過ぎない。それで手に入れたお金で戦争が起きる原因を作った日本に復讐する兵器や人型兵器を開発するためにね。」

「ちよつと、それどういう意味よ!? 復讐って一体何なの？」

その言葉にとどまった佳恵。それを無視するかのようにラグナは説明を続けた。

「今から22年前、イタリアのサンブドリアで学校でいじめにあっており、両親から家庭内暴力を受けていた18歳の少年が殺害された。殺害した犯人はその少年に虐待した両親といじめた学校の先生達とそのいじめっ子達だ。なぜその事件は起こったのか、理由はただひとつ、少年には8000億の賞金が裏社会で懸けられていたからだ。」

「ちよつと待った! それがなんで戦争が起きたきっかけになるのさ?」

「さっき言った事と今言ってる事ぜんぜんつながってないんだけど?」



ら僕を消してくれってね。」

広海の質問に答えるかのように過去を告白する慶輔。そこでラグナが慶輔の過去を語りだした。

「慶輔が通ってた武蔵野花見川学園高等部は偏差値が高さは世界中で有名だったんだ。でもそれは表の話だ。この学校は裏の顔があるんだ。」

「裏の顔とは？まさか犯罪組織とかではありませんよね？」

ティナの言葉にラグナは「正解だ。」というような表情を見せた。

「正解だ、ティナ女王。臓器密売、誘拐、殺人などを重罪を繰り返している犯罪組織が経営しているんだ。裏社会では（教育界の暴力団）と呼ばれていたんだ。」

「その学園のスポンサーは彼の両親でもあり世界的の人気俳優ヴォルマルフ・オルダインディーナとミカ・オルダインディーナ夫妻だ。その夫婦は世界中の番組からオフアアが殺到してたから年収は80兆円を超えるくらいなんだ。」

慶輔の過去を語りだすラグナとシド司令。そこでスコールがちよつと質問をした。

「その夫婦、まさか自分の息子を殺すために裏社会とつるんでいる学校のスポンサーになったのか！？」

でも一体念のために慶輔を殺したのさ！？」

「それは金と名声のためさ。あの夫婦は裏に大問題があったのさ。わがまま放題、異常なまでの金銭欲、

ヒステリックな性格だから自分の子供より金の事しか目に見えてなかったんだよ。」

「なんて奴らだ・・・！」

ラグナの説明に広海は思わず絶句するのだった。

「この事件から9年後に里見警察が無事解決させた。オルダインデューナ夫妻と学校の連中は逮捕され、死刑を言い渡され2年後に実行された。でもこの後大きな問題が発生して、第3次世界大戦が起る事になるんだ。このニュースは世界中に放送される前、オルダインデューナ夫妻の本性を知らない世界各国のメディアと住民が冤罪を主張して日本政府に謝罪するよう求めたんだ。だが日本はそれを拒否。世界各政府は激怒して日本を総攻撃したわけだ。これが第3次世界大戦の始まりだ。」

「戦争がはじまったのは2018年7月7日。各国の軍は日本人のほとんどを虐殺してしまつたんだ。」

しかし同年9月11日、魔法隕石が各国に落下して有害を与えていき戦争どころじゃなかつたんだ。各メディアはこれをミスティック・ドライブと呼んだんだ。こうして同年12月25日、終戦を迎えたわけだ。それと同時に各地に覚醒剤や臓器密売、銀行強盗などの凶悪犯罪が多発するようになったんだ。特に一番多かったのが12歳から17歳までの少女を目標にした性犯罪だ。金のために強姦、強制わいせつ、強盗強姦など毎日続いた事もあった。」

「なるほど。その内容をビデオやカメラに撮影すればAVに似た商品に変わる。それを性欲を満たそうとする奴に売りつければ金が手に入るってわけだ。」

ラグナ・シド司令の説明を理解したルーネス。そこで麗奈はある疑問を述べた。

「でもその中に慶ちゃんの両親を仇を討つために兵器や武器を作つてる人達もいるんですよね？」

「いかにも、この世界中にはまだ日本への復讐を諦めていない犯罪組織がまだたくさんいるんだ。ガルバディアもその一つだ。そのために罪のない子供達や少女達の心を犠牲にするわけにはいかないからね。だから僕はセシル<sup>かのじよ</sup>達に……。」

そういつてラグナは角を光らせ周りに白い光を一瞬にして輝かせた。次の瞬間、信じられない事が起こっていた。

「サキュバスの能力を与えたんだ。彼女達にすべての悪の心を持つ者達から邪心を奪うためにね。」

なんとそこには派手な黒いミニスカートにゴスロリの衣装を身に包み背中に悪魔の黒い翼を生やしたセシルと4人はラファエルの救護室で眠っていた4人の少女達が立っていた。一体これはどういふことなんだ……？慶輔は改めて聞こうとしたらセシルが慶輔のそばに近づいてきた。

「慶輔さん、これが私達の真の姿よ。ルーネスがいつてた事わかってくれた？」

「セシルちゃん、これが本来の姿？」

アルマがセシルに尋ねると緑色の髪の毛のポニーテールの少女、オヴェリア・ミハイロフと青い髪の毛のツインテールの少女、レフィア・パンティリモンが説明を行った。

「本来私達、ここを拠点にしてアイドルとして活動してるの。TVや雑誌の取材には本来の姿を内緒にしてね。」

「でもナイトドールに乗って戦うときはサキュバスに変身して敵と戦うの。マスコミや各メディアには内緒にね。」

そこで麗奈は二人の説明に疑問を思ったのか、改めて質問してみた。

「でもなんでマスコミには黙ってるの？私達の場合、私達がヴィオラードだっていう事は幕張町の人達には気にされてないよ？」

「その二人が言ってるのはナイトメアタイプの事だよ。もし彼女達がサキュバスの能力を持つてるとマスコミにばれたら大変な事になるからね。」

「まあ、サキュバスってイメージ悪いからな。」

ラグナとマトーヤが答えを述べると赤い髪のサイドテールの少女、リノア・ノルトベイトと紫色のハーファップの少女、アーシェ・イヴァンシュイツツが慶輔のそばに寄ってきた。

「慶輔さん、リノアの事、助けられてありがとう。」

「そしてごめんなさい、私の魔幽水が慶輔さんにかかったそうで。」

「いや、そんな事は気にしてないよ。それより魔幽水って何？」

そう慶輔がたずねるとセシルが魔幽水の説明をしてくれた。

「魔幽水はナイトメアタイプの女の子の体の中に入っている特殊な力が入ってる尿の事なの。自身の危機が迫ると身を守るために股から流れてくるの。個人ごとに効果が別々なの。すごく恥ずかしいけど仕方がないの。これも自身を守る手段なの。だから、私達もう普通の女の子には戻れないの……。」

そう説明して涙ぐむセシル。もはや彼女の涙は普通の少女とは替わりはなかった。そこでラグナは彼女達の過去を慶輔達に教える事にした。



「セシル達が人間だった頃、両親に性的虐待を受け続けていたんだ。何とか警察のおかげで施設に入れる事はできたけど戦争が終結した後、施設の職員達に無理やりAVに出演させたり風俗店で働かされたんだ。彼女達は抵抗したけどやむなくお金のために殺されたわけだ。」

「酷すぎるわ……。」

衝撃過ぎたセシル達の過去に佳恵は思わず絶句した。この後スコールが改めてシド司令にお願いをした。

「シド司令、お願いだからさ、彼女達にも戦力としてガルバディア討伐に入れてやってくれないか？こんな女の子達だってナイトドールの契約者なんだ。」

「ああ、これは私からもお願いするよ。ヴィユヴェールを手に入れるために彼女達が必要なんだ。それだけじゃない。慶輔君も彼女達のことが入ってるみたいなんだ。友達のなっであげてもらっていいかな？」

「ちよつと司令！何て事いうんですか！？」

シド司令の茶化した言葉に慶輔は顔を思わず赤くした。そしてラグナは静かにその場を立ち去ろうとするかのようにドアを開けた。そこに麗奈が尋ねた。

「ラグナ様、もう行っちゃうんですか？」

「ああ、ちよつと疲れたからね。バーフォンハイムに着くまで一休みしているよ。慶輔、彼女達の事をよろしく頼むよ。お互い心の傷を抱えたもの同士仲良くなれるはずだしさ。」

「わかりました。セシルちゃん、改めてよろしく。」

「ありがとう慶輔さん……。」

慶輔とセシル――。

この出会いが二人の運命を加速していく事を知らずにラファエルはバーフォンハイムに向かっっていくのだった。

そしてその頃、ガルバディア本国では拠点となる巨大要塞が完成間近でだった。本国の工場では最後の仕上げに取り掛かるうとしていた。そこには内海堂の姿があつた。

「ついにできたか……。僕達の砦となるものが。後は彼らが集まるのを待つだけか。待つてるがいい、慶輔・オルダインディーナ。

この僕達ガルバディアが君達の命を破壊してみせよう……。あはははははは！！！！！！！！！！」

内海堂の怪しげな笑い声が工場全体に響いていた。

- - - t o b e c o n t i n u e d - - -

### Phase 3 忍び寄る悪魔達

慶輔達がバーフォンハイムへ向かっている一方、茨城県から程遠く離れた太平洋側。そこは、海の生物達が日常生活をしている。その海の上を移動している一つの巨大要塞があつた。その名は戦闘要塞「さざなみ」。ガルバディア帝国が開発した彼らの拠点となるというものだ。その中にはガルバディアの將軍と思われる数人の変わり者が乗っているのだつた。

「うゝむ、それにしても、この巨大要塞さざなみの完成記念の発進式も兼ねた日本旅行とは、大胆な計画を出したもんだね。」

ブリッジのシートに座りながらそう言ったのは白い仮面をつけ、和服に身を包んだガルバディアの將軍の一人、藤本卓郎<sup>ふじもとたくろう</sup>。扇子を武器として戦うあつかい者の一人だ。

「この巨大要塞は、無能なガキ達の虐殺を目的として開発された大型戦闘要塞ですからね！中には死体を保管するブリザートルームが設備されてるから新鮮な臓器がいつでも用意できるわけですよ！これらを各病院に売りつければ我々は億万長者ですよ！ヒヤゝッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ！」

「ちよつと明彦！私達の目的はあくまでも打倒日本とガルバディアの発展だという事を忘れないでよ！まあだけど、さざなみを作るのに今お金がないのは事実だけど……。」

狂気に説明するのは蝶の仮面をつけた兵器開発担当の中尾明彦<sup>なかおあきひこ</sup>、力のない者や使えない者は容赦なく殺してしまえばいいと残酷な性格の持ち主でもあり金の亡者でもあるのだ。その中尾にあきれ口調で言ったのは青いバンダナに大きな碇型の武器を持った

女性は滝島麻衣。

荒い気性と馬鹿力の持ち主でガルバディアの切り込み隊長だ。

「まあまあ麻衣よ、そういうでない。力なき者&使えぬ者は情けを  
かけずに殺す。これは鬼多刃羅氣世先生きたはろきよの教えでもあるはずだろう  
?」

そう滝沢に言ったのは白いロングヘアに中国風の衣装を身に包んだ  
江連久美子えづれくみこ。中国拳法の達人であり格闘専門の戦闘マシンである。

「それにしても、本当に凄く大きい!!!うちのメカニックもよくこ  
んな巨大要塞を造れたものね!」

「だろ?これでも1000億はしたんだぜ?そのため俺たちが  
どんな想いで臓器密売・盗撮・銀行強盗・野球賭博をやったかわか  
るか!？」

高梨夏喜たかなしなつきはこの船の予想外の大きさにびっくりしていると光谷学こうたにまなぶは  
興奮しながら説明していた。

「はあ、備えあれば憂いなし、とはよく言うけどさ、うちの国、  
ホントに用意周到ね。こんな物を造るなんて...」

本国のメカニックの凄さに矢場崎瞳やばさきひとみはただため息をつくのみだった。  
まして1000億という大金でこんな大きな戦闘要塞を作ってしまった  
のだから。するとどこからか誰かを呼んでる声が聞こえた。み  
んなが振り返るとそこにはたくましそうな筋肉を持った大男、松田まつだ  
景けいの姿があった。

「おい、他の連中はどこ行った?次の戦闘までに訓練したいんだけ  
だよ、誰もいねえんだよ。」

「内海堂がまた新しいロボットを開発したから格納庫にいるよ？」  
「またか、これだから人間は困るんだよね。」

一方ここはさざなみの格納庫。そこには内海堂とガルバディアの将軍達が集まっていた。そこにはいろいろな種類の動物の頭を持った沢山の人型兵器がずらりと並んでいた。

「内海堂。これらのロボットは一体何なのだ？」

そう質問したのはりりしい態度が目立つ赤いアホ毛の女、橘田有紀きじただゆき。彼女の質問を受けた内海堂は笑みを浮かべた。そして軽々と説明を開始した。

「あれは君達に載ってもらおうと思ってる僕らの新しいロボットさ。この前僕が戦った猫の頭を持った人型兵器があまりにも優秀だったからさ、ガルバディアのメカニックに頼んで開発してもらったのさ。」

「その猫のロボット、どういう兵器だったんだ？お前の事だからあつさり倒しちまったんだろ？」

そう口ずさんだのは海賊風の衣装を身に纏い、柄の悪そうな隻眼の男だった。彼の名は中山文則なかもつみのり。ガルバディアでは海軍の総大将を勤めるほどの器の大きい男だ。その中山の質問に内海堂は笑いながら答えた。

「ハハハ。僕のバハムートもさすがにそれは無理だったよ。何せ4機もいたし、数的には僕が不利だったからさ。倒すのはこれからのお楽しみって事にしたよ。」

「で、おめおめと尻尾を巻いて逃げてきました、の間違いじゃないのか？内海堂。」

内海堂が話終わるとどこから鋭い声が響いてきた。声の主は白い和服に身を包み、白いメッシュの長髪で残酷そうな表情を浮かべている森竜太。高慢で自分の役に立たないものは切り捨てる冷酷な性格の持ち主だ。その問いがけに内海堂は苦笑いした。

「さすがにこれは酷いな。せめて現状を見て自分の判断で撤退したとってほしいな。まあ、僕が敗戦濃厚になったのは変わらないけどね。」

「まったく。少しはガルバディアの騎士の自覚を持って！これだからキザな男は信用ならんのだ！」

そう答えたのは紺色の長髪の女、引田麻貴。ガルバディアの將軍でもありキザな態度をとる男性に対して男と認めないという頑固者だ。引田が呆れているとどこからか女性の声が聞こえてきた。後ろを振り向くと白い長髪と狐の耳のような髪型の女とおっとりとした性格で茶色い長髪の絶世の美少女らしき少女が立っていた。

「引田、そういうでない！その4機の猫ロボット、内海堂を苦戦させたのじゃ。もしここで撤退していなかったら内海堂は命を落とすておったぞ！」

「それにいいじゃないですか。おかげで敵のロボットの情報を得ることができたし。ここは内海堂の功績をたたえましょう。」

前者は迫田節子。銀狐の異名を持つ怪力が自慢のガルバディアの將軍だ。後者は山川広美。上品な言葉使いで有名なガルバディアの將軍の一人だ。この二人のフォローを受けた内海堂はある提案を將軍達に伝えた。

「ところであの子供達は どうしている？このロボットを彼等にも少し提供をしようと思うんだけどいいかな？」

「お前、正気か？いくら將軍になったとはいえ彼女達はここに来てからまだ数ヶ月しかたっていないのだぞ？」

「いいんじゃないのか？あいつがやるって言うてんだ。もしなんかあったらあいつが責任を取るっていうことで？ましてや戦力が上がるしよ。」

「もしかしたら内海堂より優秀なパイロットになるかもしれんぞ？可愛い子には旅をさせろってよく言うだろ？」

「ふふふ、内海堂の考えには参りますわね。」

「まったくだ、あはははははははは！」

いろいろな意見を述べながら談笑する橋田、中山、森、山川の4人。そこで内海堂が何かを決心したかのようにそこから去るうとしていた。そこで迫田が内海堂に訪ねた。

「どこへ行くのじゃ内海堂？」

「ああ、ちよつと野暮用だよ。」

ここはさざなみのブリーフィングルーム。第3次世界大戦後に住む場所と家族を失いガルバディアでの生活を余儀なくされた子供たちの家となっていた。そして戦争の原因を作った日本を恨み、日本政府に復讐を誓う子供達もいた。

「どうして私達がこんなことにならなきゃいけないの！？悪いのは日本なのに！？」

恨みの言葉を紡ぐツインテールの金髪少女、竹中たけなかえみり絵美里もかつては欧州市民に過ぎなかった。しかし、魔法隕石が落ちてきたのをきっかけに、他の少女少女と同様將軍になるため訓練と教育を受けなが

らガルバディアでの一人暮らしを強いられることとなった。今やガルバディアは世界中の少年少女達を戦闘マシーンに教育する戦士育成所となっていた。

「…今度こそ日本を滅ぼしてやるんだから、この剣に誓って！」  
「相変わらずのきれっぷりだな、絵美里。」

復讐の炎を燃やす彼女に茶髪の少年、川村琢磨かわむらたくまがクールな言葉をあらわにしながら声かけた。

「当然よ琢磨！日本政府があんなデタラメを流したせいで戦争は起こったのよ！？おまけにオルダインディーナ先生達がつった俳優専門学校はつぶれ、パパやママ達は日本軍に殺され、あたし達はここのザマよ！」

「ふっ、やれやれ。まるで気を荒くした野良犬だな。俺もその武勇、見習いたいもんだぜ。そこらの貧弱なメス猫共とはえらい違いだぜ。」

「ちよつと琢磨、誰がメス猫ですって！」

絵美里と琢磨の会話にピンクのロングヘアに和服風のミニスカートすくすくの少女、鈴村由佳すずむらゆか。絵美里と同じく第3次世界大戦ですべてを失った少女の一人でガルバディアの教育を受けて、つい先日、将軍になつたばかりだ。

「お前の事だよ、由佳。ろくにロボットの操縦できなくせに死ぬのが怖いってビービー泣いたの誰だよ！？」

「それは将軍になる前の話でしょう？でも今の私は身も心も強くなつたんだから！あと本国の強いサポートも受けてるんだから！」

「そうよ！今までの私達とはぜんぜん違うんだから！日本政府の奴らに目に物見せてやるわ！」



琢磨の挑発に興奮する由佳、絵美里。そこで紫の長髪に黒い蝶の髪飾りとアクセサリーをつけた女性が近づいてきた。

「それなら昌代の出番ね。ちょうど新しい毒薬も完成したし、準備はさつき完全にできたばかりなの。」

彼女の名は飯野昌代<sup>いいのあかり</sup>。毒薬の制作を得意としており、勝つためなら手段を選ばない性格の持ち主でもある。さらにどんな卑怯な事を平気でやってのけるといふ恐ろしい一面を持つ、ガルバディアのつわものだ。

「昌代、あなたしばらく姿が見えなかつたけどどこ行ってたのよ？」  
「理想の毒薬作つてたの。今度作つたものは昌代の自信作よ。その効果を見たらきつと驚くわよ？」

そついつて昌代は冷たい目線で絵美里たちのほうを見つめて怪しげな笑みを浮かべた。その笑ひはまさに凍りついた心を持った毒蛇のようなものだった。琢磨が恐る恐る昌代に質問をしてみる事にした。

「昌代、お前が作つた新しい薬。一体どんな効果があるというんだ？まさかいつてきでも飲んだらすぐ死ぬつて奴か？」

「それはないね。言つておくけど昌代はそこまで鬼じゃないよ？あえて言えば敵の精神を破壊すると共にある効果が追加されるお薬なの。ちよつと瑠衣に実験台<sup>モルモット</sup>やつてるから見せてあげるね。」

昌代が笑顔で手を上げるとメインモニターから衝撃映像が流れてきた。なんとそれには一人の少女外池瑠衣<sup>とのいけり</sup>が腕を縛られてミニスカートから黒い液体を排出していたのだ。しかもその表情は狂つたかのように笑みを浮かべていた。

「ちよつと昌代！一体何なのよこの薬！？瑠衣がおかしくなってるけど何が起こってるのよ!？」

「まずは落ち着いて絵美里。今度の薬は狂わせるだけじゃないの。この黒い液体のほう見てごらん？この後すごい事になるから。」

昌代の説明通り謎の黒い液体を見てみると一行の目にとんでもない衝撃映像が飛び込んできた。なんと黒い液体からシャボン玉がたくさん出てきてそこから巨大なハエやうじ虫などたくさん生まれてきているのだ。由佳は恐る恐る昌代に質問してみた。

「昌代……。この薬何でできてるのよ？まさかとは思うけど覚醒剤使ったの？」

「これはモスフングスの果実から作ったの。この果実は魔法隕石のエネルギーでできてるから覚醒剤に近い効果があるの。でも瑠衣には後で効果が切れるから命に別状はないよ？」

ものすごい恐怖の笑顔で説明する昌代。その時、内海堂が昌代たちの後ろに現れた。思わず他のメンバー達もドキッとした。

「話は聞かせてもらったよ、昌代。なかなかいい薬を作ったじゃないか。」

「ああ……。内海堂様……。！今のお言葉、ありがたき幸せでございます！」

内海堂がこう言った瞬間、昌代は顔を赤くし幸せそうな笑顔を浮かべた。これを見た鈴木、竹中、川村もさすがに呆れそうだった。そこで内海堂は例のロボットの設計図を彼らに見せた。

「僕が頼んで制作してもらったロボットの設計図だ。今度君達にパ

イロツトをやってほしいんだよ。君達は本国のアカデミーで最低限の訓練を受けているから簡単に使いこなせるはずだ。」

「すごい！ライオンやトラの人型兵器じゃない！！おまけにウサギヤリスまであるわ！」

「さすがですよ内海堂さん、こんなにたくさんロボット一人で作ったんですか？」

竹中、鈴村が興奮していると内海堂は笑いながら答えた。

「さすがに僕一人では無理だよ。これらはガルバディアの兵器開発スタッフと制作工場のクルー達が君達のために汗水流して作ったものだ。まあ、この企画を立てたのは僕に変わりはないけどね。」

「ちーいやみな野郎だぜ、あんたはよ！」

川村が怒りを覚えた表情を見せると内海堂はその場を去ろうとしていた。

「おっと、その彼を機嫌悪くしてしまったようだ。どれに乗るか決まったら僕のところに来ておくれ。その件でよく話し合おう。あと画面の彼女にもよろしく伝えておいてくれないかい？」

「はい、内海堂様！」

昌代がかわいげな笑顔でその場を去る内海堂を見送った。そして3人はモニターに写る狂気と快楽に浸りながら黒い液体を排出する瑠衣の表情を見つめていた。

「あああ〜ん！！！！私、もうとまらないです〜！！」

「どうしよつか、瑠衣？このまま放って置くわけにはいかないよね？」

「本人が幸せそうならこのままでもよくな？」

「そうね……。」

呆然とする3人。それでも瑠衣は幸せそうに快樂に浸り続けたのだ  
った。

- - - t o b e c o n t i n u e d . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6247w/>

---

魔法騎士《マジカルナイト》慶輔BASARA

2011年11月15日21時01分発行